



著者はソ連生まれのキリーロバ・ナージャさん。両親の転勤でロシア、日本、イギリス、フランス、アメリカ、カナダと6カ国の学校に通った経験を持つナージャさんが、それぞれの国で体験したことや違い、発見を紹介している本です。国によってこんなにも違うんだという驚きとともに、何を大事に考えるかでやり方って変わってくるんだなあ、と、「ふつう」の概念がひっくり返された感じで、とても興味深い内容でした。

たとえば、小学校の座席。日本ではペアになることもあります。基本は1人掛けでみんな先生(黒板)の方を向いて綺麗に並んでいますよね。隣の人よりも「先生との会話」がメインになります。ロシアでは男女がペアで2人掛けが普通で、日本と同じように先生との会話メインなのだそうです。ところがイギリスでは、まるでごはんを食べるようないくつかの大きめのテーブルが並んでいて5~6人でテーブルを囲んだまま授業、先生との会話より、「友達同士の会話」が中心。グループごとに話し合いながら答えを探していき、グループで選んだ答えをテーブルごとに発表するのだそうです。また、フランスでは円をつくるように机を並べ、先生は円のなかに入って必要になったら子どものところへ行く形式。先生がみんなに問いを投げると、みんなで激しく議論するのだそうです。アメリカも円になって座るやり方ではあるけれど、真ん中にじゅうたんがあり、その上にソファがいくつかあって、まるでリビングのような雰囲気なんだそうです。ちょっと離れたところに大きめのテーブルがあって、個人作業をするときとみんなで議論するときは円に並んだそれぞれの席に座り、本の読み聞かせのときはソファでリラックスして聞く、算数の授業では大きめのテーブルを使うなど、目的に応じて使い分けるのだそうです。特に理由など考えたこともなかった「座席の在り方」ですが、実は「教え方の方針」を示しているようなのです。先生の話真剣に聞いてほしいのか、生徒に発言してほしいのか、みんなで意見をまとめてほしいのか・・・。



他にも、体育で整列するとき、ロシアでは背の高い順に並ぶとか、アメリカでは先生のまわりに生徒があぐらをかいて座るのが普通だったり、フランスでは整列するどころか体操服も体育館もなく、その時期に習うスポーツに合わせた動きやすい服装に着替えて、そのスポーツに合わせた施設にみんなで行くのだそうです。カラダを動かすことが目的で、勝負するようなスポーツは少ないとのこと。

また、日本では小学校に入学する年齢がみんな6歳なのに対し、ロシアでは子どもの発育や個性に合わせて入学の年齢を決めるとのこと。標準は7歳だけれども6歳からのクラスもある(5歳や8歳で入学することもあるらしい)。ちなみに7歳クラスは、4年生を飛ばして3年生から5年生になり、そこで6歳からのクラスと合流することになるのだとか。

「昼食」に関して、フランスではカフェテリアで食べることもできるけど、多くの子どもはいったん家に帰って家族と一緒に昼食を食べるとか、イギリスでは給食か自前のランチかを選ぶことができ、国籍の違う子が多くいたので、それぞれのご飯のバリエーションが豊かだったんだとか。ロシアは日本と同じで全員給食だけれども、朝ごはんまでもが給食、ロシアの場合、日本と一緒に基本的に好き嫌いがあっても出されたものは全部食べるように求められるそうです。それに対して、アメリカは朝からメニューを見て、給食か自前のランチかを選ぶシステム。アメリカでは嫌いなものを無理に食べさせられることもなければ、残してもなんの問題もない。「お金を払ったのはあなた(の親)だから、どう扱うかは自由」ということらしい。同じ場所で同じものを食べることで一体感を生もうとするロシアや日本、クラスメートよりも家族との時間を大事にするフランス。多様性を大事にし、個人の宗教や主義、思想に柔軟に対応するイギリスやアメリカなどなど、他にも、興味深い違いがたくさんあり、全部は紹介できませんので、興味を持たれた方はぜひ、この本を読んでみてください。

ナージャさんは言います。「『絶対的な正解』をみんなで探すのではなく、一人一人の『正解』をみんなで見つけていくしかないのだ。子どもが変われば、ベストは変わる。時代が変われば、ベストは変わる。目的が変われば、ベストは変わる。正解はない、違いがあるだけ。あなたにとってのベストはなんですか？」

(キリーロバ・ナージャ『6カ国転校生 ナージャの発見』 集英社インターナショナル)